

「今」と「未来」を往還するキャリア教育の展開

— 職場体験を基盤として —

Team Career Education Developers

伊藤圭祐, 杉田進太朗, 武内ショーン, 林大智, 林田圭, 山崎麻友, 韓笑, 趙徳慧

〇県内のS中学校に出向き、中学校第2学年の生徒に「今」と「未来」を往還するキャリア教育の授業を展開した。S中学校で行っているキャリア教育を基盤として、3つの授業を展開した。職場体験に目的をもって取り組めるような「事前指導」、勉強と将来とのレリバンスを図った「事後指導①」、そして最後に将来の自分を見据え、今自分に何ができるかを考える「事後指導②」を行った。その後、生徒の学びや感想、授業の最後に行ったアンケートを分析することによって、記述に表れた生徒の姿を見取った。今回の実践を通して、今自分にできることを頑張ろうと思ったり、将来について真面目に考えてみようと思ったりする機会になっていたようであった。しかし、学習を通じて獲得する力や習得する学びの必要性を感じにくいといった記述も見られた。

Keywords : キャリア教育, ライフキャリア, 職場体験, 教科横断, キャリアプランニング

1 研究の背景と目的

今日の学校教育では、学ぶことや働くこと、生きることの尊さを実感させる具体的な実践の場として、職場体験が実施されている。文部科学省は2005年から職場体験の実施を推進しはじめ、2017年度の公立中学校における職場体験の実施状況は、98.6%に上っている（国立教育政策研究所、2019）。

職場体験後に行われる事後指導については、文部科学省が2005年に出した「中学校職場体験ガイド」の「第3章（6）事後指導の充実」において目的がまとめられている。「職場体験の質的向上、体験の深化・共有化、日常的な学習活動への意欲の向上等を進めていくためにも、保護者や事業所への報告会等各各学校で創意ある事後指導のプログラムを設定していくことが必要である。」と示されている。

この「職場体験ガイド」を参考に、文部科学省が2011年に出した「中学校キャリア教育の手引き」では、事前指導や事後指導の重要性を示している。特に、事後指導の内容としては、作成した礼状や報告書を持参しての事後訪問、進路指導に向けた課題目標の提示などの内容が示されている。

しかし、こうした形の事後指導では以下の2点の課題が残ると考えられる。

①職場体験を含むキャリア教育のプログラムが教科学習とは独立して存在しており、キャリア教育

での学びと日々の教科学習が繋がっていない。

②職場体験の事後指導のプログラムが体験の振り返りかえりにとどまっており、現在の学校での学習や生活の動機づけや未来の自分のライフキャリアについてのプランを想像することにつながりにくい。¹つまり、基礎的・汎用的能力で示されたキャリアプランニング能力の育成につなげるにはこの2点の工夫が必要だと考えた。

そこで、本研究チームでは、「①教科学習で身につけられる力が、日常生活や働くことに生かされていると実感すること」、「②今の自己の姿を分析し、未来のライフキャリアのイメージや行動目標を描くこと」の2つの要素を職場体験の事後指導に組み込んだプログラムの実践を行った。

2 研究仮説

(1) 教科学習で身につけられる力と「日常生活」・「働くこと」とのつながりの実感

各教科で身につけられる力と、「日常生活」・「働くこと」との関連性を実感できるように、教科横断的授業を行った。教科に分かれてポスターセッションを行い、各教科で身につく力について学習し、その後、各教科で学んできたことを班でまとめる活動を通して、視覚的に「日常生活」・「働くこと」との関連性を理解させた。この学習を経ることで、生徒た

1 ライフキャリア…人の生涯の経歴全般を総称したキャリアの呼

称。職業に関する経歴部分のみを取り出した「ビジネスキャリア」と対比して用いられる。（厚生労働省、2002）

ちが日々の教科学習が自身の将来につながっていることを実感し、より積極的に教科学習に取り組めるようになることを理想とした。

(2) ライフキャリアプランのイメージ

生徒が職業体験において「働くこと」の本質を知るのみならず、将来のキャリアプランも視野に入れられるよう、職場体験でインタビューを行った。

インタビュー結果を共有し様々な生き方を知ることや、自分を見つめなおす活動をもとに、5～15年後の自身の姿を想像したキャリアプランを作成させた。また、このプランも仲間と共有させることで自己理解を促し、他者が思う自己の姿を受け取ることや、他者の構想から自己のキャリアプランを再考する。この学習を経ることで、生徒たちが自身の理想像をより具体的に形成し、今と未来を生きていくようになることを理想とした。

3 研究実践内容

(1) 研究対象学校

0 県 S 中学校 2 年生

(2) 実施内容

9 月 27 日に自己紹介をし、表 1 (省略) の研究実践以外に前後で計 6 回の放課後学習支援を行い、生徒・教員とのかかわりを深めた。

(表 1 省略)

4 結果・考察

本プログラムの結果については、授業中のワークシート 2 部 (教科の学びと「日常生活」・「働くこと」のつながりを可視化するワークシート、ジブン・イマ・ミライシート) と授業後に行った本プログラム全体のアンケートを分析媒体とした。作成したアンケートは表 2 である (表 2 省略)。このアンケートについては、青木 (2012) の研究である「カンザス州カウンセリングプログラムのモデルとガイドライン」を基にした。質問項目の内容的妥当性については数回にわたり青木と筆者らで協議を重ね、作成した。計 11 項目における質問項目については、「職場体験効果」、「授業実践効果」、「ダミー項目」の 3 つを設定し、4 件法により、回答を求めた。

(表 2 省略)

(1) 「授業実践効果」に関する量的調査

① 教科学習についてのアンケート結果

教科横断的な視点で、各教科で身につけられる力と「働くこと」・「日常生活」との関連性について生徒はどのように捉えたかを測定するための項目として、表 2 の (9) 「以前より、「今の学習が、仕事にもつながっている」と感じるようになった。」、(10) 「以前より、「今の学習が、日常生活にも生きている」と感じるようになった。」を設定した。

結果はダミー項目に比べ、高まった。

② ライフキャリアについてのアンケート結果

仕事だけでなく、趣味や家庭などのキャリア形成を行うライフキャリアについて、生徒はどのようにとらえたかを測定するための項目として、「(3) 以前より、「人生の将来のプランを立てることは重要なことだ」と思うようになった。」、「(4) 以前より、「今、何を頑張ったらよいか」について考えるようになった。」、「(5) 以前より、「自分の将来の姿と仕事との関係」について考えるようになった。」、「(9) 以前より、「今の学習が、仕事にもつながっている」と感じるようになった。」、「(10) 以前より、「今の学習が日常生活にも生きている」と感じるようになった。」を設定した。結果はダミー項目に比べ、高まった。

(2) ワークシートに関する質的調査

① 教科学習についてのワークシート

この調査では、事後指導①で取り扱ったワークシートのアンケート項目を分析対象とした。アンケートでは、「大人になった時、教科で身につく力がどのような場面が必要だと考えますか?」、「感じたこと、考えたこと、気になったことなどを自由に書いてみよう」という質問を行った。分析方法は、2 つの質問の回答を分析するにあたり、個人の主観や恣意的な選択が反映されにくくなるよう、KJ 法を用いて 4 名で行った。調査対象である S 中学校生徒の回答数は 86 である。

はじめに、1 つ目の質問の対する回答において、学びや身につけられる力と具体的な場面 (「働くこと」・「日常生活」) を関連付け記述しているかという観点のもと、分析を行った (表 3)。

表 3 生徒による設問回答の分析 ※無回答者 1 名

【学び・力と場面】 37	【場面】	26
【学び・力】 14	【両方に関する回答無し】	8

具体的には、「理科や社会や数学もいろんな見方をする時大切だと思った。英語の「コミュニケーション能力」はサービス業などのお客さんと話したりするときに必要だと思った。」などと【学び・力と場

面】に関する回答が最も多かった。このことから、事後指導①を通じて、教科で学んだことと場面（「働くこと」・「日常生活」）と関連付けて考察することができていたことがうかがえる。

次に、自由記述に関する分析・調査において、回答の項目分析を行った。最も顕著に見られた回答としては「これからの意欲や願望」に関する回答で今後の勉学や将来のために努力をしようとするという回答があった。その他は「学びの必要性の認知」、「関係性やつながり」、「義務」、「具体的な将来のイメージ」に関する質問もあった。

しかしながら、中には実践した授業や教科での学びにおける「違和感」を主張する回答があった。学習を通じて獲得する力や習得する学びの必要性を疑っており、将来を見据えた授業を実施する際は、教科学習を通じて学んだことが本当に活かされていることを、生徒に対し、実証する必要がある。

② ライフキャリアのワークシート

(図1 省略)

このワークシートを用いた授業のねらいは、以下の二点にある。

- (a) 生徒が自己理解に基づく未来の姿をイメージできるようにすること
- (b) 生徒が将来構想に基づいた行動目標を設定できるようにすること

(a) 未来のイメージについて

(省略)

(b) 行動目標の設定について

(省略)

5 まとめ

本実践を踏まえて、キャリア教育の専門性だけでなく、それぞれのメンバーがもつ各教科での専門性を活かして、授業実践を行えたことが成果であると考えている。キャリア教育は、多様な形で教育実践が行われてきている。キャリア教育の専門的な知見を得るとともに、自分たちの研究領域でキャリア教育を活かしていくことが実践において大切であると考えている。今回、グループ研究という形をとることで、各

教科での専門性を活かすことができたのは言うまでもない。

今後も、キャリア教育の視点を持ちつつ、各々の研究や授業実践を深めていきたい。

謝辞

本プロジェクト実施にあたり、S中学校での実践に当たり、紹介頂いた原先生、調整・相談・授業実践を快く受け入れて頂いたS中学校教員の皆様には、多大なご協力を頂いた。

社会科院生室の皆様には、ご指導、助言を頂くとともに、部屋を協議・打ち合わせの場として使用させて頂いた。

チームファシリテーターの青木多寿子教授、桑原敏典教授、三宅幹子教授、早川倫子准教授、又吉里美准教授から、専門的な立場から多くの助言、ご指導を頂いた。

ここに記し、深く感謝の意を表したい。

註

文部科学省、「中学校職場体験ガイド」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/026.html

文部科学省、「中学校キャリア教育の手引き」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/1306815.html

青木多寿子(2007),「「ベスト実践集(1997)」に見るカンザス州(米国)のカウンセリングプログラムの開発」, 学習開発学研究

厚生労働省職業能力開発局,「キャリア形成を支援する労働市場政策研究会 報告書」

<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/07/h0731-3a.html>

附記

この報告書は、学会等での発表を予定している。学術的な研究発表は、未発表のものを発表する必要があるため、ここでは結果を省略した形で概要だけを掲載した。